(Ⅳ－48)　南アルプスにおける価値づけられた景観に関する研究

山梨大学循環システム工学科　○正会員　北村　眞一
北陸コンサルタント　非会員　沢井　恭子

1.　目的とその背景

国立公園として価値づけされた南アルプスの魅力を味わうことのできる場所はどこか、またその山岳景観を保全するためにはどの領域を保全対象とするべきか、指定以来開発が進められているが、そのあり方を今日改めて検討することが必要である。そのための基礎資料として本論文では、南アルプスの山岳写真を対象とし、以下の項目の解明を目的とする。

1）山岳写真の構図とテーマを明らかにする

2）視点場となる撮影地点の分布

3）被写体の山岳や植生や岩石などの視対象の領域

2.　分析の方法

1）出版社や単行本編集者、雑誌編集者、市町村担当者など、一定基準の評価を得て社会的に一般の人が目に触れることができる写真として、代表的な「写真集」と地元の市町村の「観光パンフレット」を用いる。

白籏史朗、日本南アルプス、山梨日々新聞社、1988

山と渓谷　南アルプス特集、山と渓谷社 、1994, 3

森田敏隆、南アルプス国立公園、毎日新聞社、1995

山梨県南ア山麓16市町村観光パンフレット1997

上から４６，３４，１１５枚合計２５８枚の写真。

2）構図の構成の分析では、山岳景観の構成要素、近景から遠景までの要素の配列、視点から対象を見る視線の方向、構図のテーマ、季節、天候、空の割合、光の方向、効果、植生などを詳細に記録する。

3）写真の撮影地点（視点場）と写真の被写体（視対象）とを地図上にプロットし、南アルプス国立公園の中で特によく撮影地となっている地点の分布、及びよく被写体となっている対象山岳や岩石や植生を抽出する事により、景観的に重要な視点場と視対象を明らかにする。

3.　分析の結果と考察

1）山岳景観写真の構図は、視点場の枠組み（近景の枝葉等）、中間要素（視点と対象の間の樹林等）、対象、背景からなる。

2）対象は主として、地質景観、気象景観、植生景観、人物景観、人工物景観、光線景観、天空景観であり、主景によって、山岳型、渓谷型、植生型、人工物型、人物型に景観が分類される。

3）樋口の距離分類 1)によって、視点と対象の距離から考察すると、近景（23%）、近景＋中景(25%)、近景＋中景＋遠景(22%)、近景＋遠景(8%)、中景(11%)、中景＋遠景(7%)、遠景(6%)と分布しており、中景を中心に近景と遠景を取り込むダイナミックな景観が中心である。また近景、中景、遠景においてそれぞれテーマ（主景）となる要素（巨岩など）と関連がある。

4）視線方向は、仰観(42%)、水平(47%)、俯瞰(11%)、空撮(1%)と分布する。水平景と仰観景が代表的な景観である。

5）撮影地点（視点場）の領域は限られている（図1）。山頂(18%)、尾根(35%)、山腹(30%)、沢(7%)、平地(8%)、空撮(2%)で、尾根・山腹の登山道が多い。特に高い独立峰（甲斐駒ヶ岳、北岳など）、特に高い群峰（荒川三山など）からが多く、峠として夜叉神峠が多い。それらは国立公園の特別地域の特別保護地区に指定されている範囲と概ね一致している。視点場の代表的なものは以下の９つである。

（1）甲斐駒ガ岳周辺

（2）仙丈岳周辺

（3）北岳－中白峰－間ノ岳－西農鳥岳－農鳥岳（白峰三山）周辺

（4）地蔵岳－観音岳－薬師岳（鳳凰三山）周辺

（5）烏帽子岳、前小河内岳

（6）悪沢岳－千枚岳－中岳（荒川三山）－小赤石岳－赤石岳－大沢岳

（7）聖岳－南岳－上河内岳

（8）夜叉神峠、南アルプス林道

（9）白鳳渓谷、尾白川

キーワード：南アルプス、山岳景観、構図、写真集、観光パンフレット

連絡先：400-8511 甲府市武田４－３－１１　山梨大学工学部循環システム工学科

6）多くの山峰を有する南アルプスであるが、被写体（主対象）となっている領域も限られている（図2）。また被写体となっている領域は尾根筋の山頂部分に多い。そして鳳凰三山や白根三山などのように、いくつもの峰が重なっているのが顕著となる。特に高い独立峰（甲斐駒ヶ岳、塩見岳、赤石岳など）、特に高い群峰（白峰三山など）が多い。対象は国立公園の特別地域の特別保護地区に指定されている範囲と概ね一致している。代表的な主対象は以下の８つとなる。

（1）甲斐駒ガ岳周辺

（2）仙丈ヶ岳周辺

（3）北岳－中白峰－間ノ岳－西農鳥岳－農鳥岳（白峰三山）周辺

（4）地蔵岳－観音岳－薬師岳（鳳凰三山）周辺

（5）塩見岳

（6）悪沢岳－千枚岳－中岳（荒川三山）－
　　小赤石岳－赤石岳－大沢岳

（7）聖岳－南岳－上河内岳

（8）その他の山岳

4.　まとめと提案

1）南アルプスをより効果的に体験する（撮影する）ためには次のような条件が挙げられる。

（1）対象となる山への距離が近い視点（中距離景と近距離景を含むことが望ましい）。

（2）対象（山頂など）を水平に見るか、見上げる位置に視点をおく（尾根、山腹、峠など）。

（3）対象の領域は北岳などの代表的な山の山頂を中心とした周辺を選ぶ。

2）南アルプスの価値ある自然を保全しつつ景観体験をするとすれば、特別保護地区においては、視点場として価値を評価された地点、現在ある登山道などを活用することが考えられる。

3）特別保護地区に指定されている価値ある自然とその景観を保全するためにはその周辺の自然と景観を一体に保全することが望まれる。

<註：引用文献>

1）樋口忠彦、景観の構造、技報堂、1975

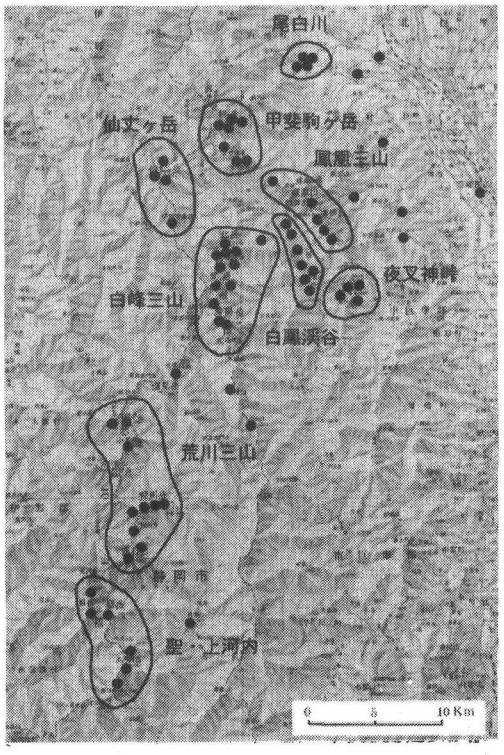

図1　撮影地点（視点場）の分布

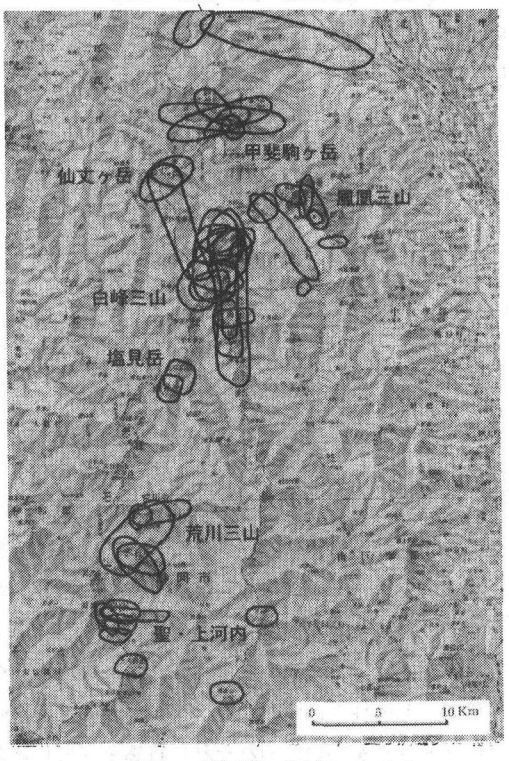

図2　被写体（対象）の分布